

気づかない方言文法：
福井県坂井市丸岡町方言における「ナ形容詞」の用法

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-02-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 今尾, ゆき子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10098/1900

気づかない方言文法

—福井県坂井市丸岡町方言における「ナ形容詞」の用法—

今 尾 ゆき子

要 旨

本稿は福井県坂井市丸岡町方言における「ナ形容詞」の活用形式とその使い分けに関してアンケートとインタビューによる調査をもとに考察したものである。考察の結果、丸岡町方言の「ナ形容詞」は「ナ型」「ゼロ型」「ヤ型」の3つの活用に大別され、①<語幹><終止><連体>が同一形式 ②<語幹>と<終止>が同一形式 ③過去活用語尾にイ形容詞と同一形式を用いるといった地域語特有の語形変化を有することが明らかになった。これら3つの活用の使い分けについて時間的限定性を用いた評価的な意味の観点から考察し、「ナ型」の非過去形は<特性><評価>、「ゼロ型」非過去形は<状態><表出>、「ヤ型」の非過去と過去形は<状態><評価>を表す場合に多用されることを指摘する。

キーワード：ナ形容詞述語文 ナ形容詞の活用型（ナ型・ゼロ型・ヤ型） 特性形容詞
状態形容詞

0. はじめに

福井県嶺北方言に属する坂井市丸岡町方言には、「ナ形容詞」¹⁾の用法において、1)～3)に示すような地域語特有の活用型が観察される。以下、方言形はカタカナで、対応する共通語形をひらがなで表記する。

1) 「ナ型」

<終止>と<連体>が同一形式で、活用語尾は「一ナ」である。このように「一ナ、一ナ」となる語形変化の型を、本稿では終止形の形から「ナ型」と呼ぶ。「ナ型」では、興味深いことに、<語幹>も<終止><連体>と同じ形式（ナ語幹と呼ぶ）である。例文(1)が示すように、推量を表す「ラシイ」はナ形容詞の語幹に下接するが、語幹は終止形、連体形と同じ形式である²⁾。

- (1) 丸岡城ノ桜、キレイナラシイノー。(きれいらしいねえ)
ナ語幹
- (2) コノ桜、キレイナワ。 (きれいだわー)
ナ終止形
- (3) キレイナ桜ヤノー。(きれいな桜だねえ)
連体形

2) 「ゼロ」型

感情形容詞「嫌だ」は、<語幹>が共通語と同じく「嫌」(^{イヤ} ϕ 語幹とする)である。<終止>も^{ゼロ} ϕ 語幹と同一形式(「嫌」)で、この活用型を「ゼロ型」と呼ぶ。終止形が「嫌ヤ」となる「ヤ型」と併用される。

- (4) 駅マデ送ッテクレンカ。
- a. イヤワ (いやだわ)。 「ゼロ型」(終止形：嫌)
終止形
- b. イヤヤワ (いやだわ)。 「ヤ型」(終止形：嫌ヤ)
終止形

3) 「ヤ型」

共通語と同様、<語幹>は「一ヤ」も「一ナ」も付かない(^{ゼロ} ϕ 語幹)。<終止>が「一ヤ」形、<連体>は「一ナ」形で、これを「ヤ型」と呼ぶ。「ナ型」「ゼロ型」と併用される。

- (5) 丸岡城ノ桜、キレイラシイノー。(きれいらしいねえ)
ゼロ語幹
- (6) コノ桜、キレイヤワ。(きれいだわー)
ヤ終止形
- (7) キレイナ桜ヤノー。(きれいな桜だねえ)
連体形

丸岡町方言で観察されるナ形容詞の活用型は、表1のようにまとめられる。

表1 丸岡町方言における「ナ形容詞」の活用型

活用型	ナ型	ヤ型		ゼロ型
語	キレイナ	キレイヤ	嫌ヤ	嫌
語幹	キレイナ (ラシイ)	キレイ (ラシイ)	嫌 (ラシイ)	嫌 (ラシイ)
終止形	キレイナ (ワ)	キレイヤ (ワ)	嫌ヤ (ワ)	嫌 (ワ)
連体形	キレイナ (人)	キレイナ (人)	嫌ナ (人)	嫌ナ (人)

これらは地域方言特有の形式であるが、殆ど話者は方言であることを認識していない。アンケートで「使わない」と回答した直後のインタビューの会話で無意識に使っている場面も多々観察された³⁾。「ギットナ（律儀な）」のように話者が方言形式であることを認識している場合と異なり、「キレイナワー/イヤワ」は方言であることに気づかず、共通語感覚で使われている。いわゆる「気づかない方言」なのである（篠崎2007：224）。共通語とは異なる形態的・意味的特徴を有するにもかかわらず使用者の方言意識が希薄なのは、共通語と同じ形式が用いられているからであろう。本稿では、丸岡町方言における「ナ形容詞」について、インタビュー調査で得た資料をもとに、その活用形式と用法を考察する。1. で、「ナ形容詞」の3種類の活用型における語形変化を、2. で、形容詞述語文における「ナ型」と「ヤ型」、「ゼロ型」と「ヤ型」の使い分けを取り上げる。

1. 丸岡町方言における「ナ形容詞」の活用型：「ナ型」「ゼロ型」「ヤ型」

丸岡町方言の「ナ形容詞」は、「ナ型」と「ヤ型」、「ゼロ型」と「ヤ型」が併用されている。前者は主として50代以上の高年者層に、後者は40代以下の中～若年者層で用いられる。また「ナ型」と「ヤ型」との混用も観察される。以下、「ナ型」「ゼロ型」「ヤ型」の各活用形式について、その語形変化（非過去・過去、肯定・否定、丁寧・非丁寧）を考察する。考察の結果、「ナ型」と「ゼロ型」は「イ形容詞」との混合型、「ヤ型」は「ナ形容詞」型であることを指摘する⁴⁾。

1. 1 「ナ型」の語形変化

前節で見たように、「ナ型」は<語幹><終止・非過去><連体>が全て「一ナ」語尾である。非過去形が「ナ形容詞」型であるのに対して、過去形の語尾は「一カッタ」となる「イ形容詞」型であり、「ナ型」の語形変化は「ナ形容詞」と「イ形容詞」の混合タイプである。

①非過去形

普通体では、終止形（肯定・非過去）の活用語尾は「一ナ」である。しかし、終止形「一ナ」で言い終える用法はなく、終助詞「ワ」か「ノ」の付加が義務的である。

- (8) a. *コノ部屋、静かナ。
 b. コノ部屋、静かナワー。(静かだわー) [普通体：終止・肯定・非過去]
 c. コノ部屋、静かナノー。(静かだねえ) [普通体：終止・肯定・非過去]

否定形は、デ連用形に否定を表す接辞「ネ」あるいは「ナイ」が後続する。

- (9) a. この部屋静かデネー。(静かでない) [普通体：終止・否定・非過去]
 b. この部屋静かデナイ。

丁寧体はナ語幹に「一デス」が後続する。

- (10) a. コノ部屋、静かナ (一) デス (静かです) [丁寧体：終止・肯定・非過去]
ナ語幹
- b. この部屋、静カデナイデス。 [丁寧体：終止：否定・非過去]

また理由を表す場合には、次のように接続助詞「デ」（「デス」の中止用法）が多用される⁵⁾。例文(11)はイ形容詞と動詞に接続助詞「デ」が後続して理由を表す場合、(12)は「ナ形容詞」に「デ」が後続する例である。終助詞「ノ」が付加されることもある。

- (11) a. 暑いデ、カブレルデ、5分タツタラ、バンソーコー、トツテクダサイ。
(暑いから、かぶれるから、5分経ったら、絆創膏を取って下さい)
- b. 年イッタデ (ノ一)、忘レテモタ。(年を取ったからねー、忘れてしまった)
- (12) a. バーチャン、ココントコ元気ナデ (ノ一)、安心ダワ。
(婆ちゃん、このところ元気だからねー、安心だわ)
[普通体：終止・非過去・肯定]
- b. バーチャン、ココントコ元気デネーデ (ノ一)、心配ダワ。
(婆ちゃん、このところ元気でないからねー、心配だわ)
[普通体：終止：非過去・否定]

②過去形

過去形は、語幹（ナ語幹形）の後にイ形容詞と同じ活用語尾「一カッタ」が付加する。

- (13) a. 秋田ハ新緑ガ、キレイナカッタ。(きれいだった) [普通体：終止・肯定・過去]
- b. 一5月に秋田へ行って来ました。
一秋田ハ新緑ガ、キレイナカッタデ ショウ?。(きれいだったでしょう?)
[丁寧体：終止・肯定・過去]

否定・過去形は「一デナカッタ」で、共通語と同じ形式である。丁寧体は「一デス」が後続する。

- (14) a. キレイデナカッタ。 [普通体：終止：否定・過去]
- b. キレイデナカッタ デス。 [丁寧体：終止：否定・過去]

なお、「元気だ/健康だ/自由だ」のように、名詞と形容詞の両用法がある語については、イ形容詞型の過去接辞「一カッタ」を使用せず、「一ヤッタ」（「ヤ型」）が使用される。「ナ語幹」＋過去接辞「一カッタ」の連鎖「ナカッタ」が、形容詞「ない」の否定・過去形「なかつた」と同一形式となることから混同を避けるためと考えられる。

- (15) a. 元気/自由が一番。 [名詞]

b. 彼は元気だ/自由だ。 [ナ形容詞]

- (16) a. バーチャン、元気ナワ。(元気だわ) 「ナ型」：[非過去・肯定]
 b. バーチャン、元気ヤッタ。(元気だった) 「ヤ型」：[過去・肯定]
 c. *バーチャン、元気ナカッタ。(元気だった)
 d. ばーちゃん、元気なかった (元気がなかった：格助詞「ガ」省略)
 名詞+「な

表2に「ナ型」の活用形式をまとめる。

表2 丸岡町方言の「ナ形容詞」：「ナ型」

語例： ^{キレイ}綺麗ナ

活用型	テンス	普通体		丁寧体	
		肯定	否定	肯定	否定
語幹	キレイナ (ライ)				
終止形	非過去	キレイ (ワ/ノ)	キレイ ^ネ ネ キレイ ^{ナイ} ナイ	キレイテ ^ス ス	キレイテ ^{ナイ} ナイテ ^ス ス
	過去*1	キレイカッタ	キレイ ^ナ ナカッタ	キレイカッタ ^ス ス	キレイ ^ナ ナカッタ ^ス ス
連体形	非過去	キレイ (人)	キレイ ^{ナイ} ナイ (人)	—	—
	過去*1	キレイカッタ (時)	キレイ ^ナ ナカッタ (時)	—	—
条件形		キレイナラ	キレイ ^ネ ネナラ	—	—
		キレイカッタラ	キレイ ^ナ ナカッタラ	—	—

*1) 名詞と形容詞の両用法がある語 (元気だ/健康だ/自由だ 等) は、過去・肯定形に「イ形容詞」型 (元気ナカッタ) は用いず、「ヤ型」 (元気ヤッタ) が用いられる。

1. 2 「ゼロ型」の語形変化

この活用型をとる語は感情形容詞「嫌^{イヤ}」のみである。過去・肯定形は「ナ型」と同じく、「イ形容詞」型活用語尾「一カッタ」が用いられ、語形変化は「ナ形容詞」型と「イ形容詞」型の混合タイプである。

①非過去形

終止形は語幹「イヤ」と同一形式で、終助詞「ワ」を伴う「イヤワ」の連鎖が特徴的である。終助詞「ノ」が後続して「イヤノー」となる場合もある。

- (17) —アノ人、ドウヤ？
 —アンナ男、イヤワ。(いやだわ)
 (18) アノ男、イヤノー。(あの男、いやねえ)

否定形は、「ナ型」「ヤ型」と同じ否定辞「ネー」「ナイ」が語幹に付加する。丁寧形は「デス」が後続する。

- (19) a. ホンネ、イヤデネー (それほど、いやでない)。
 b. ホンネ、イヤデナイ。
 c. ホンネ、イヤデナイデス。

② 過去形

過去形は「ナ型」と同じく、イ形容詞型の過去語尾「ーカッタ」が語幹「イヤ」に付加される。

- (20) アン時ハ、イヤカッター。(あの時はいやだったなあ) [普通体：終止：過去・肯定]
 (21) アノ時ハ、イヤカッタデス。(あの時はいやだったです) [丁寧体：終止：過去・肯定]

否定・過去辞は「ナカッタ」となり、「ナ型」および共通語と同じ形式ある。

- (22) a. ホンネ イヤデナカッタ。(それほど、いやでなかった) [普通体：終止：否定・過去]
 b. ホンネ イヤデナカッタデス。 [丁寧体：終止：否定・過去]

表3に「ゼロ型」の語形変化をまとめる。

表3 丸岡町方言の「ナ形容詞」：「ゼロ型」

語例：嫌^{イヤ}

活用型	テンス	普通体		丁寧体	
		肯定	否定	肯定	否定
語幹		イヤ (ライ)			
終止形	非過去	イヤ (ワ)	イヤデネー / ナイ	イヤデス	イヤデナイデス
	過去	イヤカッタ	イヤデナカッタ	イヤカッタデス	イヤデナカッタデス
連体形	非過去	イヤナ (人)	イヤデナイ (人)	—	—
	過去	イヤカッタ (時)	イヤデナカッタ (時)	—	—
条件形		イヤナラ	イヤデネーナラ	—	—
		イヤカッタラ	イヤデナカッタラ	—	—

1. 3 「ヤ型」の語形変化

「ヤ型」は「ナ形容詞」型活用で、語幹は共通語と同じである。共通語との相違点は終止形語尾「ヤ」と「だ」の交替(「ヤ/だ」と「ヤッタ/だった」)だけである。

①非過去形

「ナ型」が「一ナ」語尾で言い切る用法がなく、終助詞の付加が義務的であるのに対して、「ヤ型」の肯定・普通体では終助詞の付加は随意的で、「一ヤ」の言い切りも可能である。

- (23) a. コノ部屋、シッテ静カヤ。(この部屋、すごく静かだ)
ヤ終止形
- b. この部屋、シッテ静カヤノ。(この部屋、すごく静かだねー)
ヤ終止形

丁寧体は、共通語と同じで語幹に「デス」が後続する。

- (24) コノ部屋、シッテ静カデス。

否定形は否定辞「ネー」あるいは「ナイ」が付加する。丁寧体は「ナイデス」となる。

- (25) a. コノ部屋、静カデネー。
b. コノ部屋、静カデナイ。
c. コノ部屋、静カデナイデス。

理由を表す場合は接続助詞「デ」が用いられ、「ーヤデ」の連鎖となる。

- (26) バーちゃん、元気ヤデ、安心シタワ。(ばあちゃん、元気だから安心したわ)
ヤ終止形+接続助詞「デ」

② 過去形

過去形は、ゼロ語幹の後に「ーヤッタ」が付加する。

- (27) a. 秋田ハ新緑ガ、キレイヤッタ。(きれいだった) [普通体：終止：肯定・過去]
b. ー5月に秋田へ行って来ました。
ー秋田ハ新緑ガ、キレイヤッタデショウ? (きれいだったでしょう?)
[丁寧体：終止：肯定・過去]

否定・過去形は「ーナカッタ」で、共通語と同じ形式が用いられる。

- (28) a. キレイデナカッタ。 [普通体：終止：否定・過去]
b. キレイデナカッタデス。 [丁寧体：終止：否定・過去]

表4 丸岡町方言の「ナ形容詞」：「ヤ型」

語例：^{キレイ}綺麗ヤ

活用型	テンス	普通体		丁寧体	
		肯定	否定	肯定	否定
語幹	キレイ (ラシ)				
終止形	非過去	キレイヤ	キレイテ ^ネ (ナイ)	キレイテ ^ス	キレイテ ^{ナイ} テ ^ス
	過去	キレイヤッタ	キレイテ ^ナ カッタ	キレイヤッタテ ^ス	キレイテ ^ナ カッタテ ^ス
連体形	非過去	キレイナ (人)	キレイテ ^{ナイ} (人)	—	—
	過去	キレイヤッタ (時)	キレイテ ^ナ カッタ (時)	—	—
条件形		キレイナラ	キレイテ ^ネ ナラ	—	—
		キレイヤッタラ	キレイテ ^ナ カッタラ	—	—

以上、丸岡町方言の「ナ形容詞」の活用形式を見たが、その特徴的な語形変化は1)～4)にまとめられる。表5は、丸岡町方言と共通語との語形変化の異同を示したものである。

- 1) 活用の型が「ナ型」「ゼロ型」「ヤ型」の3種存在する。「ナ型」と「ゼロ」型は「ナ形容詞」型と「イ形容詞」型の混合型、「ヤ型」は「ナ形容詞」型である。
- 2) 「ナ型」
 - 1) <語幹><終止><連体>が同一形式で「一ナ、一ナ、一ナ」語尾である。
 - 2) 過去を表す接辞は「一カッタ」で「イ形容詞」型である。過去形は「一ナカッタ」(「一ナ語幹」+「カッタ」)となる。
 - 3) 名詞と形容詞の両用法を有する語の活用型は、過去形が「一ヤッタ」となる「ヤ型」である。
- 3) 「ゼロ型」
 - 1) 「嫌^{イヤ}」のみである
 - 2) <語幹>は共通語と同一形式(ゼロ語幹)。<終止>と<語幹>が同一形式で、<語幹><終止><連体>は「イヤ、イヤ、イヤナ」となる。
 - 3) 過去形は「イヤカッタ」となり、過去活用形式は「イ形容詞」型である。
- 4) 「ヤ型」
 - 1) <語幹>は共通語と同一(ゼロ語幹)。<語幹><終止><連体>は「^{ゼロ語幹}ゆ、一ヤ、一ナ」と形式が異なる。
 - 2) 過去を表す接辞は「一ヤッタ」(共通語「一だった」の変化形)で、「ナ形容詞型」である。

表5 ナ形容詞の語形変化：丸岡町方言(「ナ型」「ゼロ型」「ヤ型」)と共通語

活用型	ナ型	ヤ型	共通語型	ゼロ型	共通語型
語幹	キレイナ(ヲイ)	キレイ(ヲイ)	きれい(らしい)	イヤ(ヲイ)	いや(らしい)
終止	非過去	キレイナ(ワ)	キレイヤ(ワ)	イヤ(ワ)	いやだ(わ)
	過去	キレイナカッタ [㊦]	キレイヤッタ	イヤカッタ	いやだった
連体	キレイナ(人)	キレイナ(人)	きれいな(人)	イヤナ(人)	いやな(人)
条件	キレイナナラ	キレイナラ	きれいなら	イヤナラ	いやなら
	キレイナカッタラ	キレイヤッタラ	きれいだったら	イヤカッタラ	いやだったら

注：名詞・形容詞の両用法を有する語の過去形は「ヤ型」を用いる(元気ヤッタ/*元気ナカッタ)。

2. 形容詞述語文の意味・用法：「ナ型」「ヤ型」「ゼロ型」の使い分け

丸岡町方言の「ナ形容詞」は、上記のように「ナ型」と「ヤ型」が併用されている。また感情形容詞「イヤ」についても「ゼロ型」と「ヤ型」が併用されている。これら3種の活用型は、一般に、「ナ型」「ゼロ型」が高年齢層に、「ヤ型」は中・若年層に使用されるといった年齢による

使い分けが観察される。しかし調査資料を詳細に見ると、多くの場合、「ナ」型の非過去形と「ヤ型」の過去形（「キレイナ（ワ）」と「キレイヤッタ」）、「ゼロ型」の非過去形と「ヤ」型の過去形（「イヤ（ワ）」と「イヤヤッタ」）が組み合わさって用いられていることに気づく。ここでは、荒（1989）、樋口（1996, 2001）、八亀（2003, 2008）が評価的意味の観点から分類した＜特性＞と＜状態＞の概念を援用して形容詞述語文の意味・用法を考察し、3種の活用型の使い分けを探る。2. 1で「ナ型」と「ヤ型」、2. 2で「ゼロ型」と「ヤ型」の使い分けを取り上げる。

2. 1 「ナ型」と「ヤ型」の使い分け

樋口（2001:43）は「物の意義をあきらかにする人間の意識的活動」を＜評価＞と呼び、すべての形容詞が＜評価性＞を持つとして、「時間的限定性」を基にした意味的な観点から形容詞を考察し、恒常的特徴を示す「特性形容詞」と一時的現象を示す「状態形容詞」に分類している。八亀（2008）では、＜恒常的特性＞か＜一時的状態＞かという「時間的限定性」と「評価」を軸として形容詞を5分類している。このような「時間的限定性」の有無と話者の主観性が関与する評価的意味の相違は、共通語においては、「ハ」と「ガ」の使い分けとして反映されるがナ形容詞の形式的相違としては現れてこない。これに対して丸岡町方言では、＜特性＞＜状態＞といった話者の意識が捉える「評価性」の相違が「ナ形容詞」の活用形式の選択に関与することを述べる。

2. 1. 1 状態形容詞、特性形容詞の両用法を持つ場合

「綺麗だ」「元気だ」は「アクチュアルな現象をとらえていて」「特定の時間にしばられている」＜状態＞を表す「状態形容詞」としても、「物にコンスタントにそなわっている、ポテンシャルな特徴をとらえて」いて、「特定の時間にしばられていることがなく、時間外的」な「特性形容詞」としても用いられる⁶⁾。八亀（2008：40-43）の5分類に従えば、「特性形容詞」と「状態形容詞」の両側面を持つCグループに属する。例文（29a）は現在の＜一時的状態＞の＜評価＞、（29b）は特定の時間の中の状態ではなく＜恒常的＞＜特性＞としての＜評価＞を示している。このような形容詞述語文の意味的相違は、共通語においては「ハ」と「ガ」の違いはあるものの、形容詞の形態的相違は見られない。

- (29) a. 今、丸岡城の桜が きれいだ <一時的：現在><状態><評価>
 b. 丸岡城のサクラは きれいだ <恒常的><特性><評価>

これに対して丸岡町方言では、＜一時的＞＜状態＞の評価には「ヤ型」が、＜恒常的＞＜特性＞として評価する場合には＜ナ型＞が多用される。

- (30) a. (桜を見て) キレーヤノー (キレーヤワー)。 <状態：現在><評価>

b. ココノ桜は イツミテモ キレーナノー (キレーナワー)。<特性><評価>

過去の状態を表す場合、通常、「ヤ型」の過去形「一ヤッタ」が用いられる。例文 (31) のBは61才女性の発話である。

(31) A: 丸岡城ノ桜見タ?

B: 水曜日ニ バーチャンガ行ッテ、キレーヤッタト言ットツタ。(水曜日に 婆ちゃんが行って、綺麗だったと言っていた) <状態><評価>

A: 見ニ行カンカ? (見に行かないか?)

B: キレーナラシイケド、桜ニ興味ネエワ。(綺麗らしいけど、桜には興味がないわ) <状態><評価>

過去形は「ナ型」の「一ナカッタ」はあまり用いられない。70~80年代の高齢者層に観察されるのみで、使われなくなっているのが現状である。例文 (32) は (13) の再掲で、83才女性の発話である。

(32) 秋田ハ新緑ガ、キレイナカッタデショウ?。(きれいだったでしょう?)

<状態><評価>

次の61才女性どうしの会話には、「元気だ」が「状態形容詞」としても「特性形容詞」としても用いられ、それぞれ「ヤ型」と「ナ型」が使い分けられているのが観察される。

(33) (週末にBが実家の母を訪ねたことをAが聞いて)

A: バーチャン、元気ヤッタカ? <状態><評価>

B: 元気ヤ、元気。 <状態><評価>

アノ年 (82才) デ、一人デ大阪行クッテ。ドーナッテルンヤロー アノ人。

シッテ元気ナワー。(すごく元気だわ) <特性><評価><感嘆:戸惑い>

評価形容詞は「ナ型」も「ヤ型」も使用されるが、「ナ型」は<特性>に対する強い主観性を伴う<評価>に用いられる。一方、「ヤ型」は<状態>の客観的<評価>を表す場合に多用されることから、話者がプラス・マイナスの評価 (八亀2008のいう「好悪の評価」) を前面化する場合には「ナ型」が選択されるようである。

(33) a. 「シッテ元気ナワー」 <特性><評価><主観的>

b. 「シッテ元気ヤワー」 <状態><評価><客観的>

「律儀な」も<特性>を表す場合に用いられる評価形容詞で、例文 (34) は40才女性看護師の独

言である。

- (34) 看護師：「(患者の) Cさん、『混ンデルンデ 後デ マタ来ル』言ウトンナツタガ、
本当ニ来ルンヤロカ。アー、来タ、来タ。律儀ナワー。」(Cさん、「混んで
いるので、後でまた来る」と言ってなされたが、本当に来るのだろうか。あ
ー、来た、来た。律儀だわー。)

<特性><恒常的><評価><意外性：感嘆>

上例は、半信半疑状態から感嘆へと移った話者の気持ちの変化が自ずと言語表現になった主観性の強い「独り言」であることに注目したい。人に備わった<属性>に対する<評価>(律儀な性格)に好感という主観的ニュアンスを込める場合には「ナ型」が、<行為>という<一時的現象>に対する<評価>(律儀なコト)として客観的ニュアンスを込める場合には「ヤ型」が選択されるようである。

- (34') a. 「アー、来タ、来タ。律儀ナワ。」(律儀な性格)<特性><恒常的><評価><主観的>
b. 「アー、来タ、来タ。律儀ヤワ。」(律儀なコト)<行為><一時的><評価><客観的>

評価的な特性形容詞は「好きだ・嫌いだ」と同様、<いい・悪い>という判断として現れる(樋口1996:59)。例文(35)は、好感度が低いマイナス評価が前面に出た<特性>の<評価>である。

- (35) A：「アイツ、今度、^{もとよめ}元嫁ニ会ウ 言ウトツタガ、アン嫁サンモ、根気ナノー。」
(あいつ、今度、^{もとよめ}元嫁に会うと言っていたが、あの(別れた)嫁さんも、
根気だ/よくやるねえ。)

B：「どうして・・・」

A：「別レタ男ニ マタ会ウテ。」(別れた男にまた会うとは)

この場合も対象のとらえ方により話者の評価が異なり、その相違が形式の使い分けに影響を与えている。人物の恒常的な<特性>を<評価>する際には「ナ型」の非過去形、一時的な<行為>を<評価>する際には「ヤ型」の非過去形が用いられやすい。人物の<恒常的><特性>として<評価>するほうが、<一時的><行為>として<評価>するよりも価値づけや好悪の感情が全面に出た主観性の強い評価表現となる。

- (35') a. アン嫁サンモ、根気ナノー。(根気な人だね)<特性><恒常的><評価><主観的>
b. アン嫁サンモ、根気ヤノー。(根気なコトだね)<行為><一時的><評価><客観的>

上の例から、「ナ型」の非過去形は<恒常的><特性>の<主観的><評価>、「ヤ型」の非過去形は<一時的><行為>の<客観的><評価>を表す場合に選択されやすい。すなわち、「ヤ型」は<状態：非過去・過去>の<客観的><評価>を表す場合に選択されやすいと言えよう。

2. 2 「ゼロ型」と「ヤ型」の使い分け：状態形容詞「嫌だ」

感情形容詞のうち、「嫌だ」の非過去形が「時間的限定性」のない<特性>を表すのに対して、「嫌だ」の非過去形は話者の<一時的>な心理<状態>を表す。樋口(2001:53-55)は、刺激に対して人間が体験する一時的な現象を生理的状态と心理的状态に分け、感情形容詞は直接的な反応による生理的状态を、感情形容詞は直接的な反応に認知的・評価的側面が付加された価値付け的な評価を表すと述べている。しかし感情形容詞は、感情を引き起こす主体と対象(原因)を含めた認知的<評価>(情緒的体験)だけでなく、生理的反応に近い感情の<表出>(直接的体験)も表す場合がある。ここでは、主観性の強い<表出>には「ゼロ型」が、認知的評価が加わり客観性の度合いが増すにつれて「ヤ型」が選択されることを見ていく。

「嫌だ」が述語として用いられる場合、丸岡町方言では以下のような「ゼロ型」と「ヤ型」の混用が見られる。生理的反応にも似た話者の発話時における感情の<表出>には「ゼロ型」の非過去形「イヤ」が多用され、終助詞「ワ」を伴う形式が頻繁に観察される。

(36) 一駅マデ オクツテクレヤ。

—イヤワ!

<感情表出><直接的反応>

「ナ形容詞」と終助詞の連鎖については、共通語では終助詞「ネ」「ヨ」は「ナ形容詞」の語幹にも終止形にも接続するが、終助詞「ワ」「ノー」は終止形のみにも接続する。したがって、共通語では「いやわ」「いやのう」の連鎖は非文法的である。

(37) a. いやだね / いやだよ / いやだわ / いやだのう [終止形+終助詞]

b. いやね / いやよ [語幹+終助詞]

c. *いやわ / *いやのう

しかし、丸岡町方言の「ゼロ型」「嫌」は終止形が語幹と同一形式であることから、終止形「イヤ」に「ワ」が後続した「イヤワ」(<語幹>=<終止>+終助詞ワ)となる。共通語の感覚からは非文法的な連鎖「イヤワ」は、方言という認識がないまま、年齢、性別を問わず<表出>の表現に多用される。上例(36)は形容詞一語文による<表出>であったが、(38)は主語の省略、(39)は倒置による<不快>を表す直情表現である。

- (38) アン男、イヤノー。(あの男、いやだねえ。61才女性) [主語の省略]
 (39) 僕、イヤワ、ソンナコト。(58才男性)

このような生理的反応に近い感情<表出>に加えて、その原因・理由となる対象への<評価><判断>が述べられることにより話者の心的<状態>の描写に客観性が増す。

- (40) イヤワ僕、憎マレルノ。(58才男性)

<状態；発話時現在><感情表出><認識的判断>

このような場合、「ヤ型」の非過去形も広く使用される。この場合、終助詞「ワ」は終止形「一ヤ」語尾に接続する。「ゼロ型」の場合、終助詞「ワ」の付加は義務的であるが、「ヤ型」では随意的である。意味的特徴としては、<判断>の要素が前面に出て、感情的な「イヤワ」に比べて客観的である。

- (40') イヤヤワ僕、憎マレルノ。

- (41) a. 考エタケド、ヤッパリ イヤヤワ。<判断><評価>
 b. 考エタケド、ヤッパリ イヤヤ。

不快感の理由が明示されると、さらに客観性が増して話者の<感情状態>というよりは<判断・評価>の表現に近づく。

- (42) a. アノ人、シツコテ イヤヤワ。(あの人、しつこくて いやだわ)

<状態><判断><評価>

- b. アノ人、シツコテ イヤヤ。

このように認識的評価が前面に出てくると、客観性が増して「きれい」と言い換えることができる。状態形容詞「イヤ」が主体のその場限りの「一時的心理的状态」を<不快>という生理的反応として表すのに対して、「きれい」は一般的な嫌悪感を表し⁷⁾、「時間的限定性」のない<特性><評価>の表現へとずれこんでいく。

- (42') a. アノ人、シツコテ キライヤワ。(あの人、しつこくて きれいだわ)

<特性><判断><評価>

- b. アノ人、シツコテ キライヤ。

過去の状態を表す場合、「ゼロ型」の過去接辞「一カッタ」と「ヤ型」の「一ヤッタ」が用いられる。「ヤ型」のほうが一般的であるが、「ゼロ型」の「一カッタ」も性別・年齢に関係なく併用

される。例文 (43) は (20) の再掲で82才男性、(44) は33才女性の発話である。

- (43) a. アン時ハ (戦争の時ハ)、イヤカッタノー。 <過去><状態><経験>
 b. アン時ハ、イヤヤッタノー。 <過去><状態><経験>
 (44) アレ、イヤカッタワー。

「ナ型」と「ヤ型」、「ゼロ型」と「ヤ型」の使い分けを考察した結果は以下のようにまとめられる。

- 1) 現在の一時的<状態>の<評価>を表す場合は「ヤ型」の非過去形が、<特性>として<評価>する場合には「ナ型」の非過去形が選択される。
- 2) 評価形容詞が<評価>を表す場合、「ナ型」、「ヤ型」の非過去形が用いられるが、<特性>に対する主観性の強い<評価>には「ナ型」の非過去形が選択される。
- 3) 過去の一時的<状態>を表す場合は「ヤ型」の過去形が多用され、「ナ型」の過去形 (一ナカッタ) は高齢者層の使用に限られる。
- 4) 話者の発話時における感情の<状態>を表す場合、生理的反応に近い感情の直接<表出>には「ゼロ型」の「イヤワ」が選択される。不快感の理由が明示されて<判断・評価>が加わり客観性が増すと「ヤ型」が選択されやすい。
- 5) 過去の不快な感情を表す場合、「ヤ型」の過去形「イヤヤッタ」と「ゼロ型」の過去形「イヤカッタ」が併用される。

おわりに

本稿では丸岡町方言の「ナ形容詞」の用法を考察した。まず、「ナ形容詞」の活用形式は使用者が方言であるとの認識がない「気づかない方言」であることを指摘し、「ナ型」「ヤ型」「ゼロ型」の3種に分類して語形変化の特徴を明らかにした。次に、「時間的限定性」に基づく評価的な意味の観点から、インタビューによる調査をもとに形容詞述語文を分析し、「ナ形容詞」の述語用法における3種の活用形式の使い分けを探った。その結果として、共通語においては<特性>と<状態>との評価的意味の相違が形容詞の形式に反映されないが、丸岡町方言の「ナ形容詞」においては評価的意味の相違が形式の選択に関与することを述べた。

注)

- 1) 「ナ形容詞」とは、従来、国語学や学校文法で「形容動詞」とされてきたもので、本稿では形態的分類に従い、「元気な (人)」のように連体形が「一ナ (+名詞)」となるものを「ナ形容詞」、「美しい (人)」のように連体形が「一イ (+名詞)」となるものを「イ形容詞」(従来の「形容詞」とする。このような形態的分類による用語に関して、工藤 (2007: 4)

では『「アノ人元気ナ。/元気ナ人』『アノ人元気ダ。/元気ダ人』のように、終止と連体が同じ形式になる方言がある」ことから、これを「標準語中心主義」とみなして、前者を「第1形容詞」、後者を「第2形容詞」と名付けている。村木（1998）、八亀（2008）等も「第1形容詞」、「第2形容詞」の名称を用いている。

- 2) 坂井郡高椋村（現、丸岡町）出身の中野重治（1902-1979）の自伝的小説「梨の花」にも、丸岡町方言「一ナラシイ」が観察される（下線は論文執筆者による）。

「・・おんさんが綿打ちする場所はきまっている。・・中略・・・「わん、わん、わん、・・」と口でいうほうが、だまって才榎を打つのはおんさんにからだに楽ならしいということだけはどうかやわかるようだった（集英社1974『梨の花』179）。

作者とほぼ等身大の主人公（小学生）の視点から描かれた記述に現われる特徴的な方言形式（「ナ型」）が現在も（特に50代以上で）用いられていることが本稿執筆の出発点となった。

- 3) 本稿の執筆にあたり、予備調査としてナ形容詞の活用形式に関するアンケート調査を実施した。アンケート調査では、坂井市丸岡町出身者に限定せず、20代～80代の坂井市周辺（坂井市三国町、福井市、鯖江市、越前市、あわら市）の出身者30名を対象に「ナ形容詞」の活用形式に関する使用実態（使用する/使用しないが理解する/使用しない）を予備調査した。その結果をもとに、坂井市丸岡町出身者8名（女性6名：30代1名、40代1名、60代2名、80代2名、男性2名：50代1名 80代1名）にインタビューによる談話調査を行い「ナ形容詞」の活用形式を採取するとともに、活用形式の使用状況を調査した。
- 4) 村上（2007：147）において、「熊本県宇城市松橋町方言」の第2形容詞の語形変化は、第1形容詞型、第1形容詞型と第2形容詞型の混合型、第2形容詞型の3種があり、「ナ形容詞」の活用には「ナ形容詞」型と「イ形容詞」型との混合型の語数が最も多いことが指摘されている。
- 5) 活用語の終止形に下接する接続助詞「デ」に関して、佐久間（1956/1983：187-8, 299）は、「事のおこる因縁を示す場合、用言につづける用法は、・・・「ので」として使われる」が「方言にはある（江戸言葉では『で』とだけいう）」として、「代脈が来たでいまさか引きこませ」「かんどこがわるいで昼寝しそこなひ」を挙げている。
- 6) 樋口（1996：39）参照。
- 7) 飛田、浅田（1991）『現代形容詞用法辞典』

参考文献

- 荒正子（1989）「形容詞の意味的なタイプ」言語学研究会編『ことばの科学 3』むぎ書房 147-162.
- 工藤真由美（1998）「非動詞的述語のテンス」『国文学 解釈と鑑賞』第63巻1号 至文堂 66-81.
- 工藤真由美（2001）「現象と本質—方言の文法と標準語の文法」『日本語文法学会第2回大会発表

論文集』日本語文法学会 p.20-29.

工藤真由美編 (2007)『日本語形容詞の文法—標準語研究を超えて』ひつじ書房.

小島俊夫 (1984)「形容動詞とは何か」『研究資料日本文法 第3巻 用言編 (二) 形容詞 形容動詞』明治書院 147-187.

佐久間鼎 (1956/1983)『現代日本語の研究』くろしお出版.

篠崎晃一 (2007)「気づかない方言文法」『日本語学 方言文法全国地図をめぐる』9月臨時増刊号 Vol.26 明治書院 224-229.

西尾寅弥 (1972)『形容詞の意味・用法の記述的研究 国立国語研究所報告44』秀英出版.

樋口文彦 (1996)「形容詞の分類—状態形容詞と質的形容詞」言語学研究会編『ことばの科学 7』むぎ書房 39-60.

樋口文彦 (2001)「形容詞の評価的意味」『ことばの科学 10』むぎ書房 43-66.

飛田良文、浅田秀子 (1991)『現代形容詞用法辞典』東京堂出版.

村木新次郎 (1998)「名詞と形容詞の境界」『月刊言語』27-3 大修館書店 44-49.

村木新次郎 (2000)「『がらあき』『ひとかどー』は名詞か、形容詞か」『国語学研究』39 東北大学 70-80.

村上智美 (2007)「熊本県宇城市松橋町方言の形容詞」工藤真由美編『日本語形容詞の文法—標準語研究を超えて』ひつじ書房 147-164.

八亀裕美 (2002)「<短信>非動詞的述語の継続相当形式」『国語学』208 国語学会 131-132.

八亀裕美 (2008)『日本語形容詞の記述的研究—類型論的視点から』明治書院.